

氏 名	かわぐち よしこ 川口 佳子
学位(専攻分野)	博 士 (学 術)
学 位 記 番 号	博 甲 第 574 号
学位授与の日付	平成 22 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専 攻	工芸科学研究科 機能科学専攻
学 位 論 文 題 目	C. R. マッキントッシュの建築活動における産業的基盤に関する研究 —室内装飾の施工システムの解明から—
審 査 委 員	(主査)教授 並木誠士 教授 木村博昭 教授 石田潤一郎 准教授 三木順子 准教授 平芳幸浩

論文内容の要旨

本論文は、19世紀末から20世紀初頭の英国グラスゴー市を拠点に活動した、建築家、デザイナーであるチャールズ・レニー・マッキントッシュ (Charles Rennie Mackintosh: 1868-1928) を「産業論」の立場から分析、考察したものである。

論文は、まず序章で「施工システムの解明」こそが「マッキントッシュ品質」が実現される過程を解明する手がかりであるという本論文の基本主張を示し、続いて、先行研究を丹念に辿りながら、先行研究とは異なる本論文の立脚点を明示し、さらにその意義を論じる。そのうえで、以下の三章により論旨を展開する。

第1章「マッキントッシュと「作り手」たち」では、マッキントッシュの建築家としての職能の育成とその範囲を論じたうえで、本論文の最大の成果と言える「Job Book」の解読とマッキントッシュが所属した建築事務所内すべての作品の室内装飾に関する業者とその仕事内容のデータベース化、業者のビジネス・レコードの探索という基礎作業から得られた成果を論述する。ここでは、マッキントッシュが積極的に登用していた施工業者の仕事、役割分担などが緻密に論じられている。なお、上記作業で得られた膨大なデータは参考資料として提出されている。

第2章「建築・室内装飾産業におけるマッキントッシュの位置づけ」では、第1章を踏まえたうえで、マッキントッシュと施工業者との関係、とくにその関係性におけるマッキントッシュの位置づけを室内装飾の分析から明らかにする。この章では、19世紀末から20世紀初頭のグラスゴー市の建築・室内装飾産業の状況とのかかわりにおいてマッキントッシュの姿が示される。

第3章「マッキントッシュの室内装飾の質とそのデザイン史における意義」においては、前章で分析したマッキントッシュと施工業者の関係から、マッキントッシュを「コーディネーター」としての建築家と位置づけ、そのような20世紀的な建築家像の先駆的存在としてのマッキントッシュを論じ、それが、たんに建築の世界だけにとどまらない近代デザイン史上におけるマッキントッシュの位置であると結論づける。そして、同時に、マッキントッシュが、19世紀末の英国に登場しつつあった、学校という場で美術的教養を身につけた、設計専門志向の建築家像のとる姿勢を先取りした存在であったと論じている。この章において、従来言われることの多かった「モダ

ンデザインの先駆者」としてのマッキントッシュ像とは異なる、あらたなマッキントッシュ像が呈示されている。

以上のように、本論文は、施工業者に関する緻密な分析を踏まえて、「コーディネーター」としての建築家の先駆者としてマッキントッシュを呈示して、それを近代デザイン史に位置づけようと試みた論文である。

論文審査の結果の要旨

本論文は、イギリスの建築家・デザイナーであるチャールズ・レニー・マッキントッシュに対して「産業論」的視点から考察を加えたものである。申請者の言う「産業論」は、建築家がつくりあげる建築をさまざまな施工業者の仕事の総体として考える立場から生み出されたものである。従来のマッキントッシュ論がその様式的特徴を個人の資質に結びつけ、近代デザインの先駆け的な存在としてマッキントッシュを語ることが多かったのに対して、申請者は、彼の建築に携わった施工業者を丹念に分析したうえで、その建築とその室内装飾の分析を試み、その結果としてマッキントッシュを「コーディネーター」としての建築家と位置づける。

本論文が独自の価値を有する第一の点は、これまでイギリスの研究者も手がけてこなかった「Job Book」の解読とマッキントッシュがつかった施工業者に関するデータベースの作成である。この基礎資料はイギリスにおいても公表が待たれているものであり、申請者の確かな視点と地道で粘り強い作業の成果として特筆される。そして、この基礎的作業を踏まえたうえで、申請者は、マッキントッシュを専門性の高いコーディネーター的職能の建築家として位置づけ、その近代的特性を論じている。このような視点からのマッキントッシュ論はこれまでの研究史のなかには見られず、申請者の基礎作業をもってはじめて獲得できた視点である。これが、本論文の独自性の第二点である。

上記のように、本論文は膨大な基礎的データを新知見として有し、さらに独自の視点からの考察を展開したものとして、十分評価に足るものである。

なお、本論文の一部は、いずれも申請者の単著である査読付の2論文（①②）および査読無しの2論文（③④）として、すでに公表されている。

①川口佳子：「C.R.マッキントッシュの空間構成の手法論について—インテリア・デザインにおける『空間内空間』の分析を中心に—」意匠学会『デザイン理論』第52号、49頁-62頁（2008年）

②川口佳子：「英国の室内装飾に見る感性の育成—『趣味』の展示空間を中心に—」日本感性工学会感性哲学部会『感性哲学』第8号、59頁-74頁（2008年）

③川口佳子：「C. R. マッキントッシュにおける壁面デザインの手法論の研究」財団法人鹿島美術財団『鹿島美術研究』第26号、81頁-92頁（2009年）

④KAWAGUCHI, Yoshiko : “On the “Frame for Behaviour” in the Domestic Interior Decoration by Charles Rennie Mackintosh,” ,The ICDHS 2008 OSAKA Executive Committee CSCD OSAKA UNIVERSITY, *Proceedings of the 6th International Conference of design History and Design Studies*, 390頁-393頁（2008年）